

十和田神社、喜良市の部落に川上神社、熊野宮、蒔田部落は金刀比羅宮、川倉部落の三桂神社（祭神〓大山祇命、大国主命、水波女命）、中柏木部落および嘉瀬に磯崎神社、金木芦野公園には水神宮がある。

また、家敷神として下古町舛甚半四郎家には龍神様が祀られているが、これは現在の半四郎の曾祖父に当る舛甚半四郎（天保十三年一月二十日生）が龍神信仰が特に厚く、所有地の東南にある湿地約四畝歩（三九六平方）を池に改築し、そこに龍神様を祀った（写真C）といわれている。この祠には西丈様（稻荷様）も合祀しているという。

十和田信仰（龍神信仰）は今から約一四〇年ほど前に起ったというが、イネを育て、生活の基となる水の霊威を人々は原始時代から恐れ、また敬ってきたのだろう。

前号で、次集第四集に、明治・大正・昭和の初期をまとめる。と書いたが、探ればさぐるほど何から手をついたらよいかかわからなくなり、今回は十和田様を主題に、神、神社の調査を記録してみたが、資料のあるものから忘れないうちに書いてゆくつもりだから、まとまりのない文章になる事をお許し願いたい。

◎参考文献〓青森県百科事典、青森県の地名、金木郷土史、村上重良著国家神道

〓例会の二コマ〓

太宰 治も 嘉瀬の人？

嘉瀬ふるさとを語る会では、毎月定例日を定めて例会を開いている。例会の一日、話題も村の歴史から初まって、一人の会員が『金木町の観光はこれといった特別のものがないが、太宰治でもってるんだものでねエーガ』と、現在でも若い人や学生に人気のある津軽が生んだ作家、太宰治に話が進んで、

『戦時中太宰治が東京がら一時疎開してきたとき、よく観音山や嘉瀬に遊んだと聞いているが、何が嘉瀬縁故あるだべガア』

一人の会員が、

『それア、何があるベネ、なんでも太宰の祖父ア、嘉瀬がら出た人だと聞いてるけれど』に、もう一人の会員 なんだと、

『ん、山源の三代目の養子ネ。嘉瀬の野久のぶひさの山中久五郎の次男坊であった勇之助が、安政六年ネ（西暦一八五九年）、見込まれで養子に入ったんだと、名前コ惣助にかいで、津軽でも有数の大地主に築きあげたの、嘉瀬がら婿になった惣助の太宰治の祖父だと言うことだ』に、会員の一人、

『へば、太宰治ア、金木に生いだけれども、嘉瀬の人でもあると言うことになるべ』に、

嘉瀬ふるさとを語る会では、作家太宰治は嘉瀬の人でもあり、嘉瀬の作家だと結論付けた。

水神様嘉瀬地区の祠

嘉瀬地区には十和田信仰が無いのかと云えば、組織だったものはないが、やはり稲作地帯として水神を祭っている祠がいくつか現存している。写真Aは観音山の登り口の町営住宅前にある龍神様で、ここから湧く清水は冷たく美味しい水で、かつて「観音正宗」という銘柄の清酒醸造用に使われたのである。現在は、すぐ近くから嘉瀬上水道の水が取水されている。

る。

写真B中柏木集落の東側近陵地帯にある七面大明神への参道を登って行けば中間ごろ左側の藪の中に小さな祠がある。清水が湧いた水溜り跡があって、祠も朽ち果て年代も不詳だが、かつては村人たちに龍神様として信仰されたものである。

写真Cは、前記の下古町舛甚半四郎氏屋敷内に祭る龍神様。

Dの写真は、嘉瀬山の林道をスキー場

から東へ約四・五キロ

メートル進んだ国有林

野内にある「山の神」

であるが、この下の沢

になったところに冷水

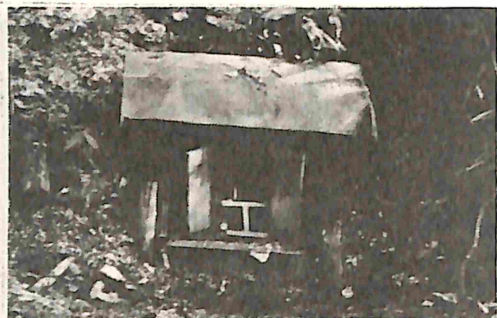
が湧き、山に入った人

たちの喉をうるおす場

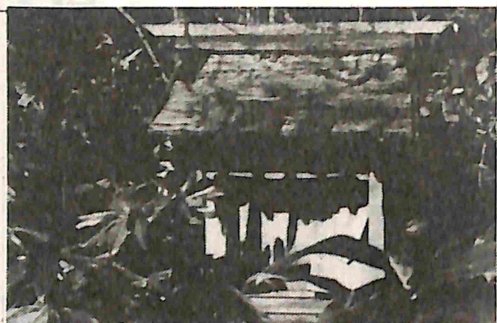
所でもある。山の神は、

春には里に下りて農作

〓共同取材、木村治利、木下清一、山中正津〓



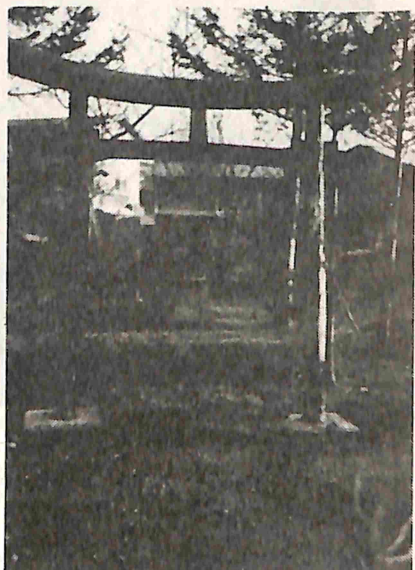
▲A=観音山スキー場登り口町営住宅前左側道路下にある龍神の祠



▲B=中柏木七面大明神参道左側にある龍神の祠



▶D〓西嘉瀬山内にある山の神祠



▶C〓舛甚半四郎氏家敷神の龍神様

# 若い頃の漫遊

小山内嘉一郎

叔父漫遊は八十二才で亡くなった、もう七年になる。叔父の若い頃といっても二十代までのことは、後半私が本人や親たちから聞いた話である。生前叔父は口ぐせのように『私が生れた時に、家の屋根に大きな鷹がとんで来たといわれる幸運児だ』とそれをとても誇りにしていた。

幼少の頃から腕白であった、やがて小学校に入り、成績は良かったけれども、腕白ぶりは増ばかりであった。とうとう先生もあきれて『お前はもう学校に来なくてもよい』といって卒業直前に退学させられた。上級生とけんかして腕にかみついたことなど、枚挙にいとまがない。

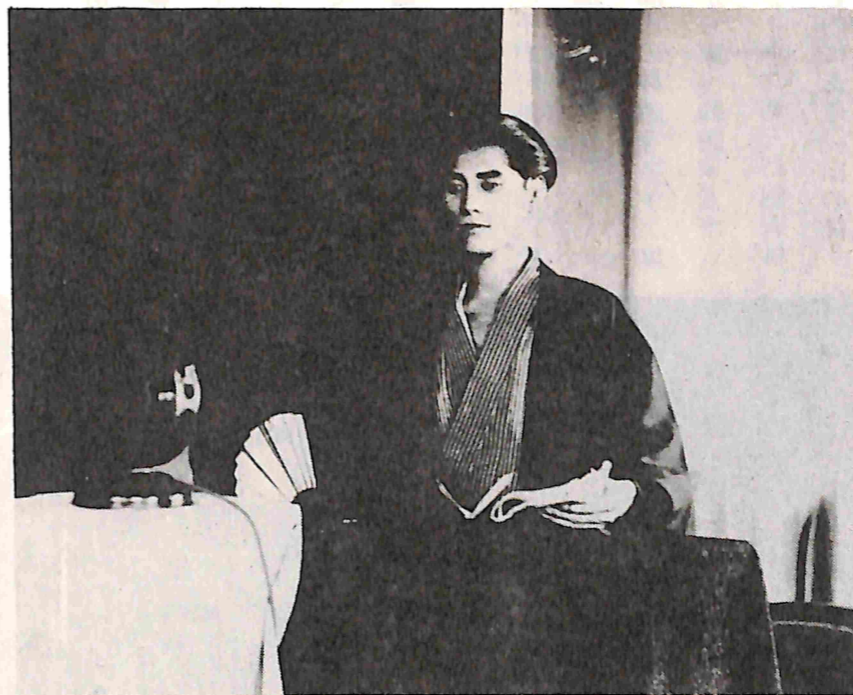
貧農の次男坊である叔父は、当時四年制の小学校を終って直ちに実社会に出る、十一の春である。しばらく家業の手伝い、それから近くにあった造り酒屋に奉公に出た、十五の時である、酒屋に使はれてからは力も強くなり、九斗の米はいつでも担ぐことができた、また酒にも当然強くなり、一升は足りなかった。もっともその当時の若者は、米の二俵担ぎや、酒の一升飲みはそんなに珍らしいことではなかったそうだが。

行ったことも、自慢話の一つでもあった。

またこの頃望まれて村の某家と、宮の沢の某家に各々婿養子にも行ったが、いずれも数か月で離縁している。宮の沢の如きは、実家にも帰らず小さな行李一つを担いで、山を越えカゲ（東郡の蟹田）まで行き、そこで田植の手間どりをして、どこへも連絡もせず一か月も雲がくれているという、およそ婿などには向きそうもないタイプであった。

声がよく民謡が得意であった。上京して同級生でもある山中利一さんには何かといろいろお世話になったとのこと、この時国粋団体に関係したり、全国の民謡を覚えるのに励んだという、ラジオ放送がはじまったばかりの頃で、全国各地を民謡で廻った。そして広島と熊本放送局から民謡を放送している。その頃に軍の特務機関などにも入り、シベリヤ、中国などにも行った。こうして民謡で世界を漫遊しようと企てた。民謡の漫遊、それに尺八の名人、柔道の師範と三人で出かけることにしていたが、これは種々の事情で果さなかった。その当時世界民謡行脚家として、中央の有力者から贈られた、天女の舞う金箔の大きなどん帳は、目を見張る程豪華なものであった。それ以後は本名（嘉七郎）よりも漫遊の名前で、皆さんに親しまれたのである。

叔父は二十代になってカムチャッカや、樺太の漁場に雇い売り（出稼ぎ）に出かけた。何年も続けて行き若干の貯えもできたので、帰郷して母親を連れて上方（関東、関西方面）見物に

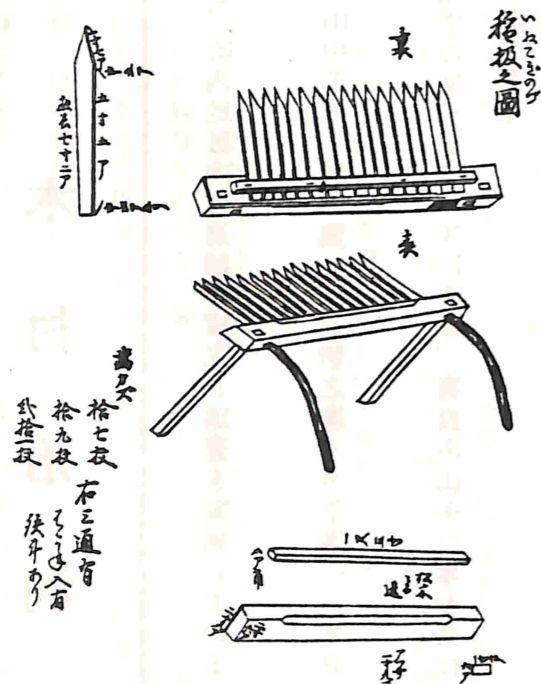


大正15年9月広島放送局に於て、津軽民謡を放送するありし日の勇姿 小山内漫遊氏

昔の農具 ①

## 稲こぎ機

千歯扱きの出現は元禄、享保（一六九〇〜一七三〇）の頃で今から二百七、八十年前と考えられる。それまでは、扱箸でなされ、二本の竹で二、三本の稲をはさみ、力を加減しながら扱を脱粒したが、枝梗が切れて完全に扱にならないことも多く、何よりも労力を要した。年貢の収納に間にあわせるために苦労した。それがその三倍能率をもつ千歯扱きが大阪で使われ、五十年ほどの間に全国に普及した。昭和初期まで千歯扱きは使用された。|| 農書全集より ||



# 踏査紀行

木村治利

嘉瀬ふるさとを探る会では、年間事業計画に基いて、県内の遺跡探訪、町内地区内の遺跡の探究と踏査を実施している。昭和五十八年九月十五日町内の実地踏査に出発する。

午前九時三十分会員が嘉瀬妙光庵に集合、参加した会員は須崎正敏・山中正津・沢田薫・秋元惣之進・木下清一・木立久二・原田万治・秋元清逸と私の九名である。

妙光庵木村清海住職から寺院内の遺物の説明を聞いて、原田万治運転手のマイクロバスに乘車、喜良市山十二本ヤスに向う。小田川湯ノ沢地藏にある五輪塔調査を主目的として一日の探究を終えたのである。

## 神木・十二本ヤス



喜良市相の山に母沢というところがある。村から六料、安次郎溜池がある川の流域にあって、ここだけはいまだこんもりと

したヒバの森林が残されている。その森林の中に、一本の木から十二本の股枝が分岐しているヒバの大木がある。

辺りは昼なお薄暗く、大木の下に小さな祠があり山の神が祭られている。

樹齡は四〇〇年と推定され、樹高三〇メートル、周囲七メートル、台木の二メートルばかりの高さから十二本の股枝が、そそり立っている。それが十三本になればどれかが枯れいつも十二本保ち、魚を突くヤスのように響え立っているのです、いつしか十二本ヤスといわれるようになった。

村人からは神木としてあがめられているが、この木には古い伝説がある。

むかし、喜良市村に弥七郎という若者がいた。たいへんな憶病者なので、いつもみんなから「弥七郎……うしろさ、タマシコきたゾ」などと脅かされ、よく青くなって震えていた。

喜良市村の若者たちは、冬になると四、五人が一組になって山に入り、山小屋に泊って伐採やソリ出しの仕事をするのがなわらわしであった。

ある年のこと、例によって四、五人連れだつて山仕事に出かけたある日、「弥七郎……タマシコくらネ……弥七郎……」とはやされているうち、なんとも薄気味の悪い「弥七郎……弥七郎……」と、「と、こだまのような声が返ってきたという。以来、弥七郎は仕事も手につかず、オロオロ気弱く、からだもすっかり衰弱してしまった。「これはきっと何かのあたりだ、このままでは殺されてしまう」と、ある夜弥七郎は一大決心をした。気味の悪い声の主と対決しようというのだ。

翌朝仕事を休んだ弥七郎は、みんなが仕事に出たあと山小屋にこもってマサカリを念入りに研いで夜を待った。

ボタ雪が音もなく降りしきる夜、「弥七郎……弥七郎……」と魔物の呼び声がした。がぼっとはね起きた弥七郎は「オー」

とこたえて、しっかりとマサカリをかざし、方向を定めて、けんめいに切りつけた。

一瞬「弥七郎……」という声がとだえ、異様な物音と共に遠ざかって行く気配がし、夢中でそのあとをどこまでも追った。とうとう見つけた。切り株に腰を下ろした魔物が眠そうに首をうなだれながらも「弥七郎……」と呼んでいるのを見つけ、「この野郎」と一撃。「ギャッ」と一声、魔物は脳天を割られて、新雪を血に染めながら切り株からころげ落ちた。

朝になって仲間と現場へ行ってみると、そこには年老いた白毛の猿の屍があった。これが杵夫たちを恐れさせていた山の魔物の正体だったのだ。

弥七郎は仲間から見直されたのは当然だが、退治された魔物のあたりを恐れて、切り株のかたわらに猿を埋め、その側にヒバの苗木を一本植えて供養したと伝えられている。

＊ ＊ ＊

それが今、十二本ヤスとよばれるヒバの古木であるが、大きくなるにつれ変な形になり、幹の途中から直立する十二本の枝が分かれて、まるで魚をつくヤスのような形をしているので、その名がつけられたという。

不思議なことに、枝が十三本になると一本が枯れ、いつも十

二本になっているということである。

昔から津軽地方では、十二月十二日を山の神の日として、杵夫達は山の飯場へ家族を呼び、御馳走や酒盛りをして安全を祈り、長く厳しい冬山の杵仕事に入るならわしであった。

一説には、山の神とはこのような年老いた猿であったかも知れないし、またそれぞれの家族であったかも知れないという。

十二は山の神祭りに通じる神聖な数、これは山の神サマが宿った木に違いないというので、鳥居を奉納、神木としてあがめ今日に至っている。

大正五、六年ころ、弥七郎沢と名がついたこのあたりを金木営林署が伐採することになったが杵夫は誰一人として十二本ヤスの周りの木を切ろうとしない。営林署もやむを得ず十二本ヤスを銘木に指定、その周辺の木とともに保存することにしたという。

いずれにしても、三本以上に分岐しているヒバは山の神の木として、杵夫は伐りたがらない。それは、幹の同じところから三つ股に生えているヒバは、その幹の分岐しているところが山の神の座所であると信じられ、御神木として祀られている。御神木は伐倒されないのが普通であるが、そのほかに伐ったときに、どっちの方向に倒れるかわからず、危険だからでもあろう

中にある、急勾配の山だが、長さ三〇センチ程の丸太で階段が作られ、山道の両側に生える植物にはその名が木札に表示されていた。

木本には、スギ、クリ、カシワ、ケヤギ、エゾヒノキ、ミツアケビ、マタタビ、トチノキ、ヒノキアスナロ、ナナカマドなどあり、草本には、ワラビ、ゼンマイ、ヒメシダ、イチゴ、イワガネゼンマイ、ツタ、スギナなど種々であった。

今日の案内役、会員の須崎正敏（金木営林署勤務）がここに何度も足を運び植物を調査研究し、自費で表示したという。須崎氏の自然を大切にす暖かい心に一同心を打たれた。どんな庭園にも自然の美しさは勝る。「自然を大切にしなければ」とつくづく痛感させられた。

僅か四、五百メートルの距離だが、急な山だけに登り下りはきつい。それだけに周囲の植物は心をなごませ、元気づけてくれた。山を下るに従って硫黄の匂いがぶんぶん漂ようてくる。周囲が高い山に囲まれ俗界と遊離された霊域に、湯の沢地藏堂は建立されていた。

昔、ある貴人（あるいは武将）が再起を図るために、この湯の沢に居を構えたもので、天文十二年（一五四二）浪岡の北畠氏が津軽地方を詳しく調査した「津軽郡中名字」によれば、奥

……。

実地踏査記録

### 湯の沢地藏尊と五輪塔

小田川の川端から旧軌道を東進する。南に広がる田圃の端に小高い山々がづらなる。昔、（一五八七年天正十五年）夷人酋長八重、佐助が大浦為信軍に攻められ、死守するもついに破れ討死した嘉瀬砦跡地である。

田圃を過ぎるとすぐ杉林であった、右、左に変わる小田川の溪流に沿って進むこと六軒、しだいに山は深く登り坂となる。紆余曲折を重ね、小鳥のさえずりも一層烈しくなる頃、何時しか小田川の急流も深い谷間に消え、藤の滝の上流に出ていた。

滝の上には、小さな祠があり、その前は十坪程の平坦地となっている。昔干魃で水飢饉になると、村人がここに集まって雨乞祭りを催したところだという。今では道路の右側も、営林署の物置場などの広場となって周囲はほとんど開墾されていた。

藤の滝から二分程走ると道路の左側に鳥居があり、「湯の沢」の標識があった。湯の沢は、この山を越え下った山合いの沢の

法郡山之辺に小田川、忌来市の両部落が記されている。これによっても、この地方は以前にすでに開けてあったものと考えられる。

往時、狩人たちが獲物を追って湯の沢附近に近よると、黒染の衣をまとった屈強の大男が現われ「ここは汝等俗人の来るところではない、ここは高貴の方が住んでいるところであるからとっとと帰れ」とかたわらの立木を引き抜いて振り廻しながら追いついたといひ伝えられている。現在の地藏堂は昭和三十四年に建てられたものである。

○湯の沢地藏尊の年中行事（五十六年度）

- 一月 二日 初詣、転読、大般若
- 一月十五日 初地藏尊、祝禱、読経
- 三月十八日 彼岸
- 三月廿四日 彼岸
- 三月廿一日 春彼岸供養、無病息災祈願
- 宗派 地藏尊を本尊とし神仏習合する。
- 祭神 薬師如来（眼病の神として又村に災難があれば汗もかぐと云われている。）
- 龍神 安産の神として又地藏尊の守護神として祭られている。
- 五輪塔 （賽の河原）水子供養、先祖供養として祭られている。
- 弘法大師 薬草の神として祭られている。

## 地藏尊と五輪塔と百合

お堂に祀られてある地藏尊と五輪塔は、転々として場所が移り変って現在に至ったもので、古老達の説を総合すれば四回目の場所に当たっている。地藏尊と五輪塔が最初に発見された場所は、現在のお堂より北西に当たる湯の沢川を隔てた通称北の沢と称する高台の場所に安置され、周囲には白百合を植えてあったという。即ち百合の根は昔から精進料理に用いたもので、当時は食用も兼ねていた。

百合は多年草であるから、一族が死に絶えても年々歳々花を咲かせて霊を慰めてくれるであろうと植え残したのだという。今では最初植えたあたりにはほとんど見られず、そこそこ僅か残っているにすぎない。

この百合については次のような伝説が残されている。湯の沢に生えている百合を勝手に掘れば罰があたって目が見えなくなる。また掘り出して村に持ち帰って植えても決して花が咲かない。この百合は白色で花びらが大きく、野性にしては珍らしいものである。

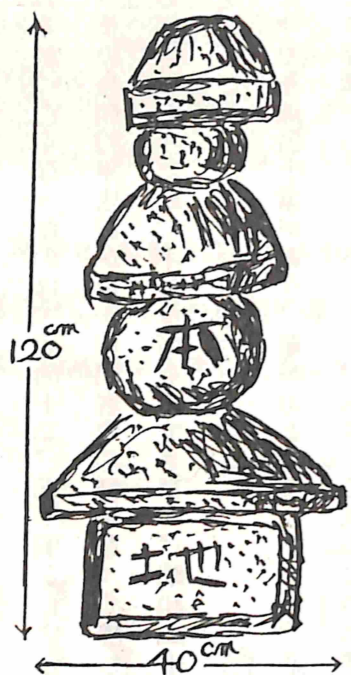
地藏尊についてはつぎのような話がある。

うし)であって、方形は地を、円形は水を、三角形は火を、半月形は風を、団形は空をあらわし、この五輪塔は密教で説く宇宙の生成要素である五大をかたどるとともに、その宇宙の根源である大日如来のシンボルとして尊崇された。

したがって初めはその形が信仰の対象とされ、堂仏造頭の記念や死者追福のために五輪塔が建立されたが、のちには舍利塔や墓標など、他の信仰的なものにその形をかたどるようになった、と云われている。

墓標にこの形をかたどることは、平安中期から鎌倉時代(一、〇〇〇〜一、三〇〇)にかけて流行し、もっぱら石で造られこれにち各地にその遺品が見いだされる。

またこれにちな行なわれている卒塔婆(そとば)の輪郭もこの五輪をかたどったものである。



湯の沢五輪塔

昔、嘉瀬村の人達が、湯の沢の地藏尊は国有林の嘉瀬地内にあるのだから村の東端にある薬師堂へ合祀せんものと、草相撲の選手達数名で湯の沢へ参り、地藏尊と五輪の塔を解体し、かわるがわる背負って村近くまで来たところが最後の休み場で、いざ出立しようとしたところ、これまで軽々と背負われてきた地藏尊が急に重くなり、一歩も歩けなくなった。

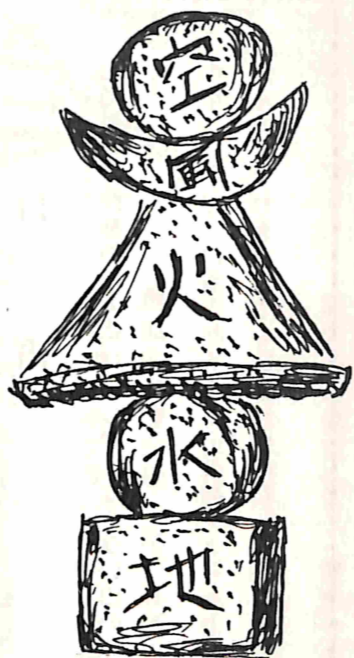
これは地藏尊が元の場所から離れるのを嫌っているためであろうとみんなで考え直し、早速前の場所に引き返したと語り伝えられている。

## ◎五輪塔について

五輪塔を探し当てるには時間を要した暗い地藏堂の中に地藏尊と一緒に手拭で頬かむりし、赤い着物を着せられていた。

やっと発見したとき、これは六輪塔ではないか。又、三段目の字が本(誤読かも)となっているのもおかしい。別にあるのではないかなど、いろいろと疑問を生じたが、結論は湯の沢の五輪塔であることを確認した。

そもそも五輪塔とは、下部から方形、円形、三角形、半月形、団形を積み重ねた塔をいう。この五つの形は密教の標幟(ひよ



五輪塔

## ※硫黄霊泉

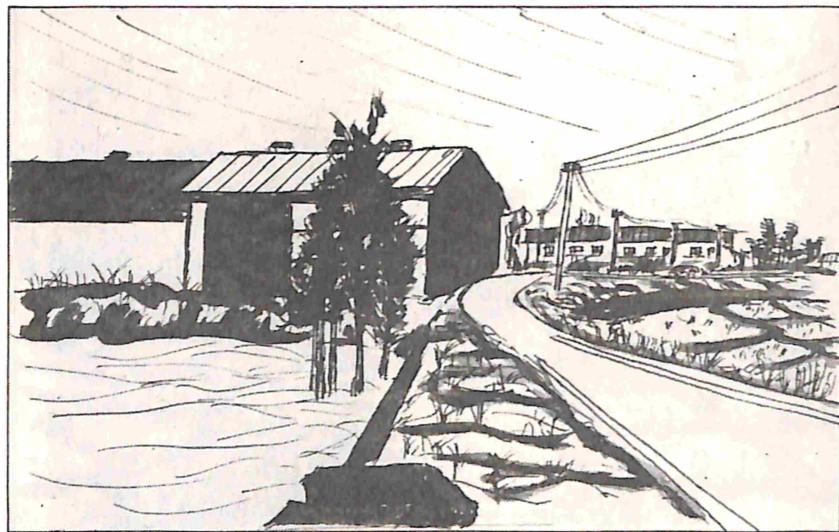
お堂の後を硫黄華が咲く、湯の川が流れている。飯詰村出身で奥谷良助という寺大工があった。この人は信仰のあついで、しかも技工の優れた人であったが、健康がすぐれなかったので種々薬餌を用いていたが、たまたま湯の沢流域に冷泉が湧き、湯花が浮いているのを見たので、川原に湯つぼを掘って入湯してみたところ、非常に効能があった。そこで他の病人にもすすめたところ全快する者が沢山あった。ライ病や眼病の人も沢山来るようになり、附近の村々でも評判が高くなった。

信仰の篤い彼は、これみな地藏様の御利益の然らしむるところなりと、自分で心をこめて唐獅子を彫刻して正面に飾りつけたが、それは見事な出来栄であった。

# スケッチ 嘉瀬

昭和20年第2次世界大戦後の嘉瀬と、戦前の嘉瀬とは様相がガラリ変った。のんびりと馬の背にまたがり田圃に通い、ジョンガラ節が流れた農村風景も、自家用車・トラックが縦横に田圃の中を走るようになった昭和も59年、様変わりした嘉瀬の一角をスケッチしてみた。

スケッチルポ きのした 清 一



清久溜池  
招魂堂

鍛冶町・本町のガキ大将連中は、夏になるとシヨコド（招魂堂）に泳ぐに行く。トツナの実を食べて、



口笛を紫にして、日長一日甲羅干しをしたもので、忠魂碑は観音山スキー場に移転。跡地には嘉瀬農協の倉庫が建った。五所川原道の雷樹（ポプラ）並木、今はない。

良助は最後までここに留まり、遂に山中で死亡したと伝えられるが、亡くなったのは、明治十二、三年頃らしいという。

その後西村平吉氏が数十年間客舎二軒をもって沸し湯を経営し相当賑わったが、不慣れな所なのでさびれ、昭和二十四年客舎を取りこわしたといわれる。

今でも風呂小屋があり、薪が山と積まれている。誰が行ってもすぐ湧かして入れるように、次にくる人のために準備して帰る信者の道であろうか。

お堂の前は、掃き清められ、草むしりされ、花壇まで出来上っている。その花壇の中に記念碑が建てられてある。

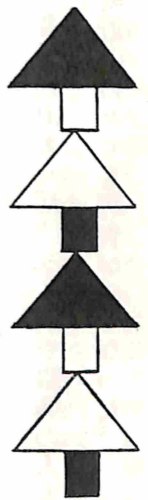
## 古川キン湯の沢地藏尊に心を捧ぐ

古川キン氏医師に身離され死を覚悟し、ひとり水行し、湯の沢地藏尊に縋り奇しくも全治されてから今日まで二十数年間仏の慈悲に感謝し境内の草を走り、木の根を起し信者を按じて自ら枯木を集め、心身の修行を指導されてきたお姿に感銘しこの碑を刻む。

昭和五十四年十月二十八日

## コラム ①

### 山のオキテ



## 焚火

昔から山で作業をする山人は、山に入って、してはならない山のオキテがあった。

焚火の火付けには、トリコ柴やカバの皮を使い、ヒバの葉は絶体にもやしてはならないことになっていったという。

これを破れば山の神が怒ってケガ人が出た。

また、使わなくなった櫓や、鉦の柄、鋸のサヤを焚火にすることを山の神がきらうので、焚き木にすることはなかった。

## 口笛

山で働らく津軽の山人には、してはならない山のオキテがあった。

山小屋の中で、口笛を吹くと、山の神がきらうといひ、酒を飲んで、さわぎたても口笛だけは吹かなかったという。